

大学放浪記 (24)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では大学の教育研究、管理運営に関して正直に、遭遇している状況から自分の意見を表したい。これまでもこのシリーズで多くの体験を基に、この種の問題を取り上げて既述してきた。しかし次から次へと事態は益々思わしくない状況に向かい、良くない部分が表面に出てきて、これでは書かざるを得ないと言う切羽詰まった、追い込まれた状況になりつつある事をあらためて寂しく、また悲しい思いを隠せない。ここでは少々厳しい表現を用いるがご容赦頂きたい。この発端は授業の分担である。既に外国人教員がタイの大学で雇用される時の最低限の義務は

- 1) . 雇用期間が基本的に1年間であること。それ以上の延長は可能であるが相手大学が認めないと不可能である。
- 2) . 講義の負担は必ず、現地大学の教員と分担すること（実質はどうであろうと、正式な書類上は分担の形式になっている）必要がある。従って外国人教員と現地教員の名前が正式なカリキュラムにシラバスとともに掲載されている必要がある。
- 3) . 負担（分担）する講義のトピック、内容については雇用する大学側と被雇用教員の合意で決まるが、基本的に外国人教員の専門、及びそれに関連する分野と言うことで有り、詳細は相互で話合い、打ち合わせを行う。最終的には公的承認が必要である。

筆者の場合、雇用される契約の段階で主に2つのことを雇用先大学より要請されていた。ひとつは学生を中心とした国際セミナー・シンポジウムへの協力、もう一つはスマート農業に関する講義（分担）である。雇用されて初期の段階では筆者の身分（正式なステータス）がプロジェクトでの雇用のため、決まっていなかったこともあり、講義負担はなかった。3ヶ月から4ヶ月を経て、講義負担の話が出てきた。しかし上記の様に現地大学の教員との共同負担と言う事であるから、その話を聞いた時点で、カリキュラム担当の事務職員にさらに内容に関する詳細な情報の提供を願い出て、自らも筆者なりの内容をまとめ提案し分担教員に提示した。仲介に入った職員も極めて無責任で、分担相手の教員と話し合っ決めてくれ、と如何にも素っ気ない姿勢である。だからこそ、打ち合わせが必要なのに全く反応がないのでは話にならない。当初は「今夜中に自分なりの素案を届ける」とのメールでの返事があったが待てど暮らせど、その様な返事はいつまで待っても来ない。そのうち開講する時期が来て講義を始めねばならなくなり、現地教員が既に最初の週に講義を始めたと言う。そこで、それはそれで良いかも知れないが、私はどうしたら良いか、と事務職員に尋ねると、貴方はその教員が講義を終えた後半を負担すれば良いという。しかし既に始めたと言う現地

教員の講義内容がどのようなものかを知らずに、同じ内容を重複して講義しても意味はないし、聴講する学生にとっても興味も新鮮さも感じない。むしろ教員側の打ち合わせの不足さを学生の前にさらけ出すだけで、近い将来彼らから批判が出る事はまちがいない。こんな無茶苦茶な教育が未だに行われて居るのかと度肝を抜かれ、その現状に失望、落胆し、「もう少し教育を受ける学生や大学のランキングアップのことも考えて、教育に対し。愛と情熱のある対応がとれないものか、正直言って非常にかっかりした」と言う内容を記して、2週間毎に学長、副学長を含む関係者に配信している **Newsletter & Information** で訴えた。しかし反応はいつもの如く全く無く、あたかもその講義負担の話は消えたかのように沈黙の日々が続いた。しかもこの講義は将来的に大学の目玉としてのプロポーザルのひとつに入っていると言うのである。上記2つのプロポーザルについては筆者も含まれているかに聞いていたが、何時まで経っても何の話もない。新学期のはじめに備えて講義負担の準備が進む中、教員は前もって登録を済ませる必要があると言う事で登録カードも作成し、新学期からの講義を心待ちにして居たが、これまた待てど暮らせど一向に連絡が無い。キャンパスで顔を合わせる教員や知人のチェンマイ大学の卒業生が、会う度に「今日は何の講義をしたのか」と尋ねるが、「いや何の講義もしていない、果たして私自身が負担する講義が有るのかどうかも分からない、連絡が無い以上どうして良いか分からない」と言うと、「そんな筈はない、全ての教員、学生は講義負担と履修申告を済ませているから、貴方だけに連絡が無いのはおかしい」と言う事で、その場で調べてくれることになった。筆者はどうすれば自分が、あるいは他の教員がどのような講義科目を担当あるいは負担し、週の何曜日の何時からという情報を得るためのアクセス方法すら聞いていないので、そうしたことを知るよしもなかった。私が調べてやろうと言う、その教員は自らのメールアドレスとそのパスワードを用いて関係の情報を見ることができる、と言う事でその場でラップトップを開き、筆者のメールアドレスとパスワードを入力したが、どうもパスワードが認識されない。仕方なくその教員が知る別の方法でアクセスして調べた結果、筆者の名前は「その資料の何処にも見当たらない」ということであった。このことは講義負担が無い事を意味する。聞くところによると、当初言われて居たスマート農業に関する講義もすでに始まっていると言うことは、筆者はその役割から外されたことになる。聞くところによれば、この講義に関しては、あらたに3名の教員が講義分担に加わると言う事で筆者のオフィスの隣の大部屋にその3名のデスクが用意されたと聞いていた。本来、共通の部屋でコーヒーなどを湧かして飲む部屋であったが、未だ3名の教員がその部屋に居るのを見たことがない。いずれにしても契約上、雇用側の大学が雇用した教員に講義負担が全く無く、労働負担も無い状態で給与を支払うと言う事はあり得ない。大学の講義であれば、教員にあっては登録、学生にあっては履修申告、大学は単位認定など全てが公式に処理される必要があり、講義のタイトルや中身、内容が当初より異なっても労働負担が全く無いという事態はあり得ない。またそのままの状態ですべての契約が切れる時期を迎えると被雇用者がその義務を果たさなかったと言う判断をされる危険性もある。「貴方に講義負担がないのであれば、私の講義を手伝ってくれ」と言われて

も、個人的な話とは全く次元の異なる話であるから意味はない。個人的にボランティアでの対応は賛成で、可能であっても、ここでの話は基本的に次元が違う。気の合う教員同士が意気投合して講義負担が決まるものではない。もし仮にそうであっても最終的に公的な承認がなければ、講義を開講することはできない。前もって講義負担の話もなく、またその確認方法等についての情報も無く、周囲からいろいろ聞かれて初めて、「えっ、そうなの」と言うのではやる機を失う。遅かれ早かれ、いずれはしなければならいので有れば、早めに対応しておけば不必要な人間関係のわだかまりを排除できる。管理運営ができれば教授や助教授と言った職階は関係はないと言う、大学あるいは大学人の一般常識（認識）はこのような状況を目の当たりにすると全く駄目であるかに見える。いつまで待っていても応答がないのなら、言い惜みが尋ねるしかない。しかもヘッド（主任）や学部長（残念ながら赴任して一度も会っていない）レベルでなく、さらにその上の副学長レベル（幸いにも面識があり、雇用においても世話になっただけに言い出しにくい状況にあった）でなければ話は通らないと意を決して状況を説明し、判断を仰ぐ事にした。結局、講義負担に関し正式な連絡が主任から来たのは約1週間後であるが、当初の講義ではなく、別の科目であるエネルギー関係の講義負担となっていた。本来からすればそれなりの講義準備期間を考慮して、相当の余裕期間をおいての連絡が通常であるが、まだ連絡が来ただけでも「よし」とせねばならない。副学長にこの話をした時期に、筆者宛にメールが届いた。どの様に探しても差出人が筆者になっており、メールの文面はなく説明もない。初めはわからないので放置していたが、何かの拍子に「何だろう」ということでメールを開いた次第である。何も説明がないので分からないが、ただURLのみが記載されていた。どうして筆者宛に筆者自身からこのようなメールが来たのか未だに不明であるが、詮索しても始まらないので、とにかくURLにアクセスするとそのURLの内容は1編の論文であった。ある学術誌に掲載されたもので、著者の中に副学長も、また筆者に直接関係する主任も、そして筆者自身も共著者に入っていた。論文の内容はスマート農業における農家からのデータ収集に関する内容と言うことであるが、スマート農業を全体的にイメージする物では無い。おそらく、彼らの大半が「スマート農業とは何か」と尋ねられたら、彼らの殆ど、或いは全てが即座に「このような農業がスマート農業である」と回答できる者はいないであろうと推察する。かつて筆者は「農学栄えて農業滅びる」と言う言葉で農業経営の専門家や行政に警鐘を鳴らしたが、どうもその時の雰囲気類似している。頂いた研究論文の内容は、むしろデータ収集に於ける極く一部のアルゴリズムなどを取り扱ったもので、スマート・アグリをイメージするにはほど遠いと言うのが筆者の率直な評価である。疑問に思うのは何故その論文を筆者に送りつけてきたのか、と言う点である。筆者が先に示した講義内容に対する回答なのか？、と言っても意味するところが不明である。あたかも貴方の手を借りなくても、自分達はこのように高度な事をやっていると言わんばかりの意味にもとれるが、それならば筆者を共著者に入れているのは理解できない。これまでの長期に亘る連絡のなさを詫びて、失礼な行為を帳消しにしたいと言う意味なのか、既に始まっている講義に筆者が含まれていない事への「申し訳」なのか、あるいは単

に論文での自分達の学術活動を誇示(?)すると共に情報提供するということなのか、メッセージも文面もないから意味を解するのは極めて難しい。しかし筆者は論文などの資料提供を受ければ、必ずと言って良いほど、送付と情報提供に対し謝意を表するか、励ましの言葉を返す様に心がけている。その観点から今回のことも、誰が配信して筆者に届いたのかわからぬメールでも、筆者が共著者に含まれている以上、何某かの応答をしておくべきと考え、第一著者宛に、また共著者全てにお返しとして自分の最近の論文を送付したが、共著者の一人からメール受け取りをリジェクト (Reject) されると言う事態も起きた。共著者の一人であるから論文に含まれたそれぞれの著者のバイオグラフィー (Biography) をみれば素性は分かる。ショート・バイオグラフィーを見てみるとチェンマイ大学工学部のコンピュータ学科卒とある。単なるサーバーなどの不都合でメールが戻ってきたのではなく、明らかに「受け取れない」と言うはっきりとした意思を持ってリジェクトされたと言うメッセージであるから、本人の強い意志が入っていると理解される。何故なのか、その共著者の専門分野を見て見ると「スマート農業」とある。コンピュータは専門として知っているであろうが、農業についてはどの程度知っているのかは分からないが、筆者に取っては馬鹿げた話である。こちらから頼みもしないのに、ここでは年輩の人を敬うと言う伝統 (Seniority) に準じてその論文の第2著者に名を連ねている (のではないかと筆者は考えて居た)。それでいて、同じ論文の共著者で有りながらリジェクト・メールを貰うなどとは考えられない事象である。ひょっとすると、自分達が一生懸命やって書いた論文なのに、何故、何もしない筆者の名前が2番目の共著者としてそこにあるのかと言うことに対しても、その著者なりの意志表示かも知れない。しかし筆者が依頼した訳でもないのに、勝手に名前を使われて逆恨みされるのでは、たまった物では無い。放っておけば良いのに、わざわざ返信までして余計な事をするからこのような事になる、と後悔もするが、このレベルの人間かと思えば気にもならない。これは同時にその共著者の出身大学であるチェンマイ大学の品位も下げる。こんなレベルの者しかマエジョ大学には就任できないのかと。長年チェンマイ大学でお世話になった筆者には極めてショックである。ここに大学の誇りや品格、尊厳が一抹もないことを知る次第である。しかし放っておけば大学は良くなならないし、むしろ恥にもなるので、副学長と主任、第1著者にはリジェクト・メールを転送しておいた。これら一連の事象を見ていると益々その大学の印象が低下し、入学してくる学生達にも、「なんでこの大学に来たんだ！」と言う憐れささえも感じる。では何故このような事態が生じてくるのか？ その理由は明白である。管理運営に経験不足の無能な、若い人材がその席に座して居るからである。キャリア不足ということもあるが、それならばマネジメントを勉強すれば良いが、それすらして居ない。その場しのぎの対応で、その場を切り抜け、自らは責任を取る覚悟がないからこうした事になる。いやはや残念きわまりない。対面を繕い、あたかも組織として一致団結しているかにふるまっても中身は業績稼ぎの域を脱していない。こうしたことが「これからの時代には大切で、大学としてはこのような研究、このレベルの教育を」と言う「誇り」と「自信」に満ちた心構え、信条は全く視られない。筆者がよく口にしているように「論文数が多けれ

ば、アグレッシブ（より積極的、Aggressive）にやっているかの如き、見せかけの挙動、振る舞い」を大学教員の職務と錯覚しているようでは話にならない。オリジナルなアイデア、研究、製品、結果が出ないのは当然である。最終目標は予算取りであり、優秀な人材育成、世の中をリードするオリジナルな研究開発への志は残念ながら見られない。要職にある人物の国家観、教育・研究に対する意欲（Enthusiasm）、生じてくる物事への義務と責任のなさがこうした組織を作る。世代交代しても余計に悪くなっているのは、その前の世代で十分な「志」が醸成されていないからである。標語（コア・バリュー、Core value）では立派なことが掲げられているが、周りで起きている現実を見ると、その殆どがまやかしのようにも見える。古い昔より、年長者を敬う（Seniority）しきたりはタイの文化においても高貴な伝統で有るが、個人差を差し引いても、そうした精神が大学教員の若い世代にあるとは思えない。しかもその度合いが礼儀やエチケットのレベル以下にも落ちているかに見える。若くして主任や学部長補佐などの役職につくと研究をする時間は極端に少なくなる。勉強して新しい知識、情報を入力する努力をコンスタントに継続していないと座った役職の義務と責任を果たせなくなる。研究論文を長らく書かないと書くのがおっくうになるし、学術誌により異なるフォーマットに合わせて論文の本文を仕上げる煩わしさが余計に論文を書く意欲を遠ざける。いわゆる論文書きに慣れていないから手が付けられなくなる。するとそのことが煩わしくなり、益々書きたくなくなる。秘書や助っ人がいれば、その部分は任せれば良いが、すでに論文を書く気力が無くなる。その様な人物が要職に座れば管理運営において組織にとって障碍にこそなれ。大学の振興にポジティブに機能するとは思えない。歴史があっても常に大ナタを振るい大学を良くしようとする志がない大学は凋落の軌跡を辿るしかない。いわゆる組織の構成員の意識改革が必要である。大学人にその意識がなければ大学の活動は益々じり貧になり、挙げ句の果てにホープレス大学に転落する。

今少し今回の出来事に関し筆者なりに考えることは、2週間毎に提出しているバイ・ウィークリ・レポート（Bi-weekly report）を誰一人として読んでいないのではないのかと言う懐疑的観測である。提出した報告書が読まれていようが、いまいが被雇用者としては、それが義務と考えているので提出をやめる気は無いが、情報が常に一方通行で、無反応では目的さえも見失う状況になり大学に来る意義や祖の組織での存在にも疑問を呈することにもなる。

さらに、気は進まないが「何故講義の分担者として敬遠されるのか」と言う点について加筆しておく。この状況を話したら、別のタイの大学の知人から次のような答えが返ってきた。即ち

- 1) 一緒に講義を負担する自信が無いのではないか。
- 2) 分担する教員と外国人教員が学生から比較、評価されるのを嫌っているのではないのか
と言う2点である。

もしこの指摘が当たっているとすれば、如何にしてこの問題を解決するかと言う事になるが、結論は学生に接触させない、会わせない
またその機会を極力作らない、すなわち学生に対し顔を合わせる機会を極力作らない、と言

う対応である。それはとりもなおさず講義担当から外すと言う事に他ならない。学生にとってその講義が必要、かつ重要なのか、それにはどのようなコンテンツとすべきかなどはどのように良いかのように扱われている。筆者が素案を作って提示したのに対して全く何の反応もなく、すでにその講義が始まっていると言うことは、講義分担者として、あまり歓迎されていない、また参入して貰いたくないと言う意志表示と解してもそれほど間違っていない。上記知人の指摘が概ね当たっているようでもある。この様な内部事情であるにも拘わらず、スマート農業が大学レベルの研究課題申請目標の一つになっている事が滑稽(?)である。本来大型予算の申請を考えるなら、それ相当の研究者、教員が何人かいて、それなりの論文、業績をあげ、国内はもちろん国外にまでその情報が「発信されている状態」であるべきである。新しい科目だから講義内容が準備できていないと言うのは本末転倒である。準備ができてから新しい講義の開講を認定しているのである。そのうち徐々に準備して充実させていくと言うのであっても、あまりにも準備不足である。それだけにどのような内容をその講義で教えているのか疑問である。日本の大学改組の時にファカルティ・ディベロップメント (Faculty development) がやかましく言われた。これは教員個々の講義に他の教員が授業参観し、どのようなことを講義しているか、教え方、教材の良否、準備、進め方などいくつかの視点からその講義について意見を述べ、教育のレベル・アップ、質的向上を図るというものである。教えているところを見られて恥ずかしい講義なら即刻取りやめるべきである。昔聞いた米国の大白での講義について、開港されている講義であっても、学生からの反応 (Feedback) で、履修申告者が7名を切るとその講義はカリキュラムから消えると言う。履修申告者数の母数がどれぐらいかははっきり聞いていないが、ひとつの評価である。もちろんタイでも学生からの評価はある。筆者もこの評価で講義から外された経験もある。理由は何か? その担当講義は日本の夜間大学、定時制に似た講義で、もちろん共同分担の形を取るが、その講義の聴講学生は社会人でありウイークデイ (Weekday) には企業などで働いており、ウイークエンドの講義に出席するべく大学に来る。彼ら学生の意見は、筆者の講義が「英語」で行われるから、余り理解できない。週末に出てきているのであるから、英語が分からず単位が取れないのでは困る。「タイ語での講義で単位が取れないのならまだしも、英語が分からず単位を落とすのは嫌だ」と言うのが言い分であると事務側は説明している。英語での講義は履修申告の前から分かっていることであるし、仲の良くなった社会人学生との夕食や授業での会話では、彼らがそれほど英語で困っているようには思えなかったし、むしろ積極的に英語での会話で筆者に近づいてくるように感じていた。しかし、英語だからと言う理由での講義に対する事務サイドからの低評価には参った。どうも一緒に講義をするのは都合が悪いという意図が分担者に働いているようなところが見え隠れする。毎回の講義では常に自作のパワーポイント資料を使い、講義の終わりには惜しげも無くファイルごと配布するという形の講義形式であり、彼らがそれほど英語にアレルギーを持っているようには見えなかったからであり、むしろ逆に彼らは積極的であった。一度社会に出て、再度大学で学ぶという社会人は目的意識がはっきりしており、普通の大学生とは大きく異なる。

だからこそ夕食に招いたり、いろいろ話をする機会を持ち、きわめて親しくなった学生（社会人）もいた。筆者自身、講義分担者と競争する意図もないし、むしろ協調を重視してきた。ただ聴講する学生にできる限りの講義をしたいと言う以外に何の企みも持っていないが、時々こうしたことに遭遇するのは残念である。